

夏目漱石

文学雑話

文
学
雜
話

○なんですって？ 『ぐびじんそう虞美人草』ですか。ハ、アあれに表
 われたラヴが近代的で面白いおもしろと言うのですか。別にそう
 いうつもりで書いたわけでもありません。かくべつ新し
 いこともないでしょう。そうですね、ちか近ごろのものでラ
 ヴを書いてよくできているのはいろいろあるかもしれな
 いが、私の好きな一つを言えば、ズーデルマンの『カツツ
 エンステツヒ』（猫橋）——英訳では女主人公の名を取
 って『レギーナ』と言っている——の書き方です。あれ

はたいへん旨い。レギーナは無学文盲なほとんど貞操

ヴァージニティ

とはどんなものかということも知らぬくらいの女で、

こちら

日本で言えば房州あたりの、船頭せんどうか何かの娘くらいなも

のでしようが、それと、今一人教育ある男とが、ある事

情のたために社会から隔離かくりされて、一つ屋根の下に共棲きようせい

している。だからまったく交際はない。外へ出れば兩人

とも迫害を受けるくらいのものです。それでこの女が

たゞ一人でその男の世話をせねばならぬという特別なシ

チュエーションに置かれてある。もちろん身分の懸かけ離

れていることからして、男の方ではシムパシーさえも持

ちえない。女の方ではラヴという字義さえ知らない。この兩人の間のでき事である。くわしくいうと女は全然野性の儘まで、ある意味からいうとけだもの獣物に近いところがある。それで面白いことにはまったくインノセントである。というのは操を汚すことなどはいくら行やっても、善い事とも思わない代りに悪い事とも考えない。善悪を超越している。したがって行為上他人から見れば墮落しているが、事実上本人からいえば純潔である。本当の自然の儘まで、修養とか学問とか見識とかでちつともモディファイされておらぬ。その獸的な自然のまゝのうちに、女はたゞ一

つの暖かいハートを有^もっている。ハートがつまりあらゆる行為の動^{モチーブ・フォース}機力^スで、一挙一動これに支配せられて、しかもその発動の目的物はこの男のほか^なに無い。けれども夫婦になろうという成算のあるでもなくまたラヴとも自覚しない、ほとんど無意識に、世話をせねばならぬ、男に慰^{コンフォート}樂を与えたいというだけの考で、情愛の強い、人情のある方面に非常に活動している。そこで昔の小説にもよく貴人と平民の恋はある。かのグリセリダの話などもそれであるが、そんな場合に我々の目には単に身分の懸隔^{けんかく}ということだけが映ずるばかりで、身分のインフ

イーリオリテイーに従って起る事実上のイグノランスとかブルータリテイーとかは全くネグレクトされている。ちつとも書いてない。しかしズーデルマンのにはこれらをことごとくあるがまゝに、具われるがまゝに書いてある。その点が新しい。

○そしてその書き方——こういうシチュエーションにある二人のラヴの書き方が面白い。男にはシムパシーがなく女にもラヴが無い——あるいは無意識に働いているかもしれないぬが——それがおいおいに動かされて行くプロセスを旨く書^{うま}いてある。口で言う^{うま}とわけのないようなもの

の、書くとなると困難な面倒めんどうなもので、とにかく不自然に
なり易やすいのは誰れも知っている事で、ことに刺激の強い、
ほとんどセンサーショナルに近い場ばかり並べてあるに
もかかわらず、それが非常にナチュラルで、デヴェロプ
メントが層々累々とシフトして行く移り工合ぐあいがたいへん
旨い。つまり私は深さのある小説だと思う。メレジコウ
スキーのトリロジー（ピーター・エンド・アレキシスを
除く）などは広さの小説で、パノラマのごとくむやみに
広がっている。エキステンションがある。（委くわしい意見
を述べると、メレジコウスキーはプロットにおいて失敗

しているということの説明すべきだが、それはかりに可
いとして）とにかく広い。スケールがジャイガンチック大である。
人物も多く場処も広い。レネイサンスというような一代
の傾向を書き表わすのだから当然の事かも知れぬが、一
方からいうとデックスが無いものとなる。こゝにいうデ
ックスが無いとは、普通にいうおくゆき奥行が無い、インナー・ミーニング内部の意味
が無いとの意味でなく、あまり興味がアクセレレートせ
られないというのである。同じインテレストが加速度を
受けてだんくくとインテンシティーが強くなるのが私の
いわゆる深さで、同じインテレストをもって進んで行く

からして作に統一とういつがあることになる。しかしこれは動やもすれば単調になり易やすい。そこで統一もあつてかつ単調を避けん為めには、同じインテレストをもつて各編を貫くと同時に、エキザクトリーに同じインテレストを各章に繰り返してはならぬということになる。すなわち同じ男女の間のラヴ・アツフェーアズでも、毎日出逢であっているのに同じ戯たわけた話をしても駄目だめだからして、なんらかの変化を与えねばならぬ。しかもそれが場所の動かない処である、どうも単調になる、変化を与えることが困難だ。しかし変化ばかりあつて統一を失つては可いけない。

だから統一はあって、単調にならずに、変化を与えて調子を変えてゆく。つまりレペテイションをするようで、だんだんと新しいところを加えてゆくという書き方、それがはなはだ困難である。

○しかしそう書いていくと、エキステンションはもちろん無い。だから興味は統一されるが、言わば細い水が一本流れて行くようなもので、したがってナローになる。だけでも同じインテレストでも加速度をもつてアクセレレートして層々累々に新味を加えてゆくとなると、そこに深さが生ずる。『レギーナ』にはこの困難な書き方で、

よほど深さを表わしている。あれがその、人里離れた処
 に男と女をたつた二人出してあるのだから周囲も変らな
 い、同じ家に住んでいるからして場所も変らぬ、それで
 いてズン／＼変化してゆくのが旨い工合に書いてある。
 で、一方からいえば、これは決してオブザベーション観イマジネーション察だけで書い
 たものでない、プロダクト像の所産イメージに相違ない。ただ客観
 的に存在しているものを忠実に写したものでなく、頭で
こしら拵えて頭でデヴェロプさせていったもので、その発展
 のプロセスがたいへん旨い。長谷川さんの『そのおもかげ其面影』な
 どはこの書き方に似たもので、やはり男女の間で層々

累々と関係が密接になり逼迫ひっぱくしてゆくふうに書いてある。しかも同じインテレストを繰り返しくしていながらあれだけに飽きないものにしたのは、レペテイションでなくしてアクセレートしたからであって、その点がたいへんの手際てぎわだと思う。

○しかしこういうふうの書き方が必ずしも佳よいと思うのではない。またすべての書き方のうちでいちばん困難だといふのでも無い。が、たゞこう書くとすれば前に述べたような点に困難があるというだけである。同じデツプスを表わす書き方でも、むろんこればかりではない。な

んの小説であつたか、男女二人の關係が近づいては離れ、離れては近づくとたがいちがいう互違たがいの形式があつたが、これも面白い書き方でまたむずかしい。しかしバラエティー変化があるだけにいくらでも書けるが、離れる一方、近づくと一方を書くとなると面倒が起る。やゝともすると同じ事が重なるからして書き難にくい。ことに離れているのが漸々近づく方はなお書き悪い。というのは冒頭には読者の興味を惹ひく刺激がないからである。その証拠には昔の小説はなんでも構わず事件のつ初めから書き出したものである。したがって読者の興味を釣り込むまでに大分暇かかが要る。

有名な『エスモンド』などは非常な傑作であるけれども、最初の二三十頁を読み終おせるだけの根気がないと、ついに佳境かきように入る機会がなくなつて巻を伏せてしまふようなこととなる。だからこの書き方は事件からいえば自然な書き方だろうが、作家から言えばむしろ損な遣口やりぐちである。この損を悟つて気の短かい現代の読者を釣り込まうとするには、ある事件が比較的発展して、大いなるインテレストが賭とせられつゝある真最中から書き始めて、最初から読者の注意を引きつけるに限る。イブセンはこの方法を利用することの最も上手な作家である。（彼のこの手

段に訴えるのは他にテクニカルの理由のあるのはむろんであろうが)。しかるにズーデルマンの『レギーナ』はまったくこの損な方法を取っている。まるで懸隔した男女を一つ所に置いてそれをようやく近づけてゆくのだから、好い加減な所から始めるのから見ればずいぶん困難である。それをあれだけ旨く漕ぎ付けているのは、凡手ではとてもできないことである（もつともこの困難を少くする為に作家は他の方法を同時に講じているのはもちろんである。しかしそれは長くなるから述べない）。

○エ？ 『虞美人草』の書き方ですか。格別そんな事を考

えたのでもないのです。複コンプリケート 雑なラヴ・アツフエーア

ズそのものを描いたものとしてはごく幼稚なものでしょう。またラヴだけを書いたものでもないのですからね。じゃ狙ねらったものは何かというのですか、——そうですね。ラヴも書きちやいますがね。ラヴだけを描くつもりならもう少し遣やり方もあったでしょう。つまりあれはね、ラヴというものを唯一のインテレストとして貫ぬいたものじゃないから、恋愛事件の発展として見るとなかなか不完全です。それならどこが完全かといわれると益弱るわけだが、つまり二つか三つのインテレストの関係が互に

消長して、それが仕舞しまいに一所でに出逢あって爆発するところを書いたのです。書いたのじやない、書いたつもりなので。

○やはりズーデルマンの『アンダイング・パスト』になるとよほど妙なラヴですね。もちろんラヴの関係は前ちがのとは異ちがっているが、やはり層々累々の書き方を用いている。これは女が男を追っかけるのだが、その女のフェリシタスというのには夫がある、有夫姦ゆうふかんになるので男の方で始終逃げようとする。それを——フィジカリーに追っかけるのではないが——追っかけて追っかけてキャプ

テイベートする仕方がいかにも巧妙に、どうしてあゝい
 うふうに想像がつくかと驚かるるくらいに書いてある。
 誰もあんなデヴェロプメントをクリエートすることはで
 きない。そうしてこの女が非常にサツトルなデリケート
 な性質でね、私はこの女を評して「無意識な偽善家」
アンコンシヤス・ヒポクリット
 ——偽善家ぎぜんかと訳しては悪いが——と言ったことがある。
 その巧言令色つとが、努めてするのではなく、ほとんど無意
 識に天性の発露のまゝで男を擒とりこにすると、もちろ
 ん善とか悪とかの道徳的観念も無いで、遣っているかと
 思われるようなものですが、こんな性質をあれほどに書

いたものは他に何かありますかね、——おそらく無いと
思っている。その代り、これはドイツのある批評家に言
わせると、センセーショナルだと非難している。そして
その男は一方に『フラウ・ゾルゲ』を褒めて^ほいる。が私
の考ではそうでない。『フラウ・ゾルゲ』はただ、一能
才の努力に成ったものとしか思えぬ（あれが九十版にも
なった作とすれば、版を重ねるのは単に流俗の所為^{せい}だと
断言して憚^{はげ}からぬくらいです）。しかし今いった小説の
方はどうしても天才のクリエートしたものですねえ。

○『三四郎』は長くなるかというのですか。そうですね、

長く続かせるのですね。サア何を書くかと言われると、また困りますがね。——実は今お話をしたそのフェリシタスですね、これをよほど前に見て面白いと思っていたところが、宅にいた森田白楊が今しきりに小説を書いているので、そんなら僕は例の「無意識な偽善家」アンコンシヤス・ヒポクリットを書いてみよう、と、串じょうだん談半分に言う、と、森田が書いてごらんなさいと言うので、森田に対しては、そういう女を書いてみせる義務があるのですが、他ほかの人に公言したわけでもないから、どんな女ができてもかまわないだろうと思っっています。実際どんな女になるかも自分で判わからない。

かつ今お話した層々累々の叙述だけで進むのではなく
エキステンションもはいつてくるんだから、女はどうな
つてもかまわない、と言うと無責任ですが、でき損なつ
てもズーデルマンなどを引合ひきあいに出して冷かしちや不可いま
せん。

○なるほど——層々累々の書き方と私の言う徘徊趣味が
似ているというのですか。意味の取方にもよるが大きく
いえば、ある程度まではどうしても然そうなるでしょう。
もし小説を離れて写生文となると、面白味はエキステン
ションにある、平面的の興味いわば空間スペシアル的特質がある。

小説の面白味はむしろ推移的だから直線をたどるようなものでしょう、（もちろんエキステンションも交ってはいるが）。という意味は、すなわちコーザリティーをもつて貫くということなので、その線の行く先を跡付けて読者は興味を発見する。だからその極端をいうと、まるでエキステンションのない筋書だけの小説になる。だからまた一方には写生文だけの面白味があつて、小説にならぬものが存在する理由も判るでしょう。しかし写生文はパノラマ的エキステンションが重でコーザリティーから出る興味が主では無い。したがって散漫になり易い。やす

だから写生文をパノラマとすれば小説は活動写真——と
いうようなものではありませんかね。

○それでまた本メイン・カレント流にまったく関係の無いエキステン

ションはダレてしまつて漫散おちに陥る弊がある。メレジコ
ウスキーの小説を悪いと言つたのはすなわちこの点にあ
るので、むやみに延長する為めに、デイフューズになつ
て本流を失つてしまふ。その代り大きい所はあるが、刺
激が無い。また一方の直線ばかりになると肉も血もない
筋書きになる。そこの呼吸がなかなかかむずかしい。エキ
ステンションが一方の妨害をせぬように、着々と筋を運

んでゆかなければならないんでしよう。そこで私の氾漭趣味の講釈を始めるとずいぶん長くなるかもしれないから、まあ好い加減にざっと言いますが、氾漭趣味の特色はエキステンションのほうに属するので、直線を迹付けあとづける変化を面白がるほうではないのです。けれども天然自然人事ともに常に活動しているものだから、決してエキステンションだけで間に合うものは少い。まあどんなものを見て、どんな事を聞いても、移って行くとしなければならぬ。だから氾漭趣味も理想的にエキステンションだけで満足しているわけにもいかないから、こう説

明したら好いでしよう。今甲という事相が乙に移るとすると、直線的の興味は甲を去って乙になるところが主だから、乙が注意の対象になる。これに反して徘徊趣味のほうは事相そのものに執着するのだからして、興味の中心がかえって甲にある。すなわち乙に移りたくないという姿がある。だからこの二つの趣味はどうせ相俟あいまって行かなければ完全な趣味の起るわけはない。早く甲が乙に変じてくれれば可いと思うようでは、甲自身が厭あきられていてるのだから、作物としてはそこに陥欠がある。と同時についてまでも甲に徘徊するとなると、いつまでたつて

も埒らちは明かないことになってしまふ。だから甲にも興味があると同時に甲が乙に移るところにも興味を持つというふうでなければなるまいと思う。純粹の写生文や純粹の筋書的小説はこの一方だけを代表したもので、双方とも改善の余地のあるものと考えられる。

○こう説明をしておいて、あと戻りをして、あなたの先の質問に答えたら善く分るでしょう。あなたが、前述の層々累々の叙述は祇徊趣味ではないかと聞かれた時、私は幾分か祇徊趣味に違いないと答えたが、どこが祇徊趣味だか、たいていは見当がつくこととなった。すなわち

今こゝに男女の關係を層々と重ねて描いてゆくとする
と、各章毎に旧い分子と新らしい分子が交ふるつて来ること
になる。全然新らしければ漸次の発展でもなんでもない。
また全然旧ければ前章の繰り返しにすぎない。だから各
章ともに前章のあるものを繰り返すと同時に、前章にな
いあるものを付加しつゝ進まなければならぬ。そうな
ると、その二要素のうちで、新らしいところは前章から
脱化した変化であるから直線的に推移の傾向を満足せし
めるし、また古いほうは前章をそのまま重複するのだか
ら、いつまでも一所に定住して、祇徊的に味わいたいと

いう傾向をも満足させる。したがってこのかき方はエキステンションと直線とを合併したもので、外の言葉でいうと、低徊趣味と推移趣味の一致したものに相違ないでしょう。この場合におけるエキステンションはむやみに新事相を付加するのではなくて、旧事相の重複なのだからインテレストの統一上最も便宜なものである。それからこの場合における直線推移は一道のコーザリティーで発展するから、これまたインテレストの統一を破る憂うれいはない。だからこの書き方は深さを生ずる書き方だと言ったのです。

○纏まとらぬ話ですが、これくらいにしておきましよう。

(明治四一・一〇・一「早稲田文学」)

日本文学電子図書館

文学雑話

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 6 卷」角川書店

昭和42年7月30日 5版発行

日本文学電子図書館